

『懷風藻』「逝矣水難留」と『方丈記』「ユク河ノナガレ」の共通認識

—比較文学的立場から—

加藤 有子

はじめに

私はこの近年、『懷風藻』の単語を中国漢詩と比較する作業を行ってきた。

その作業中、『懷風藻』詩番九七の藤原萬里作の詩中にある「逝矣水難留」を調べていた時である。中国漢詩における「逝水」や「逝川」という語が多用されている事に気づいた。『全唐詩』だけを見ても「逝水」で三三例、「逝川」は三〇例（「行川」の用例は無く、「行河」が一例、「行水」で四例）ほどである。それらの「逝水」「逝川」の発想は一つに『論語』子罕篇の影響によるものもあるだろう。また、更に他にどのような思想背景によって生まれた語なのだろうか。

そして、我が国での他の用法はどうだろうか、と考えたとき、万葉歌などにも「ゆく水」は多いが、著名な例で言えば

『方丈記』冒頭の「ユク河ノナガレ」も例示されることになる。

正確に言えば、『懷風藻』詩と『方丈記』冒頭部には多少の違いがあるのだが、両者は東アジアにおける「逝水」「逝川」の文学の流れの一端と捉えることができるのではないか。

一、『懷風藻』「逝く水」と『方丈記』「ユク河」

次に『懷風藻』詩番九七、從三位兵部卿兼左右京大夫藤原朝臣萬里（麻呂）の五首中、四首目の詩と、『方丈記』の著名な冒頭を示す。前述のように、同じく「逝く水」「ユク河」を表現しながらも、両者には多少違いがある。

五言。仲秋釋奠。一首。

運冷時窮瘁。吾衰久歎周。悲哉圖不出。逝矣水難留。

玉姐風蘋薦。金罍月桂浮。天縱神化遠。萬代仰芳猷。

ユク河ノナガレハ、絶エズシテ、シカモトノ水ニアラズ。澱ニ浮カブウタカタハ、カツ消エカツ結ビテ、ヒサシク留マリタルタメシナシ。

『懷風藻』詩の四句目にあたる、「逝矣水難留」（流れゆく水はとどまることが困難である）とあるのに対し、『方丈記』では「留マリタルタメシナシ」とある主語は「ウタカタ」である。両者の表現しようとするものには、近い要素もあり、異なる要素もあるということになる。それはどこから来るのだろうか。

『懷風藻』の注釈を見ていくと、「逝矣水難留」の出典としては『箋註』の指摘する「見論語」という指摘が最も早い。『論語』の該当箇所を示すと、

子在川上曰、逝者如斯夫。不舍晝夜。

というものである。『論語』の古注によれば、「川の水の不断の流れの如く、時が過ぎて空しく老いてゆく我が身を、孔子が詠嘆したもの」と解釈するとい¹う。

『懷風藻』注釈の流れに戻ると、『箋註』の次には釈清潭『新釈』が「孔子川上に立て、水の流れを見、門弟子に謂て

曰く、逝く者斯の如く、晝夜を捨てずと。歲月の匆匆たるを悲しむなり」とあり、林『新註』や杉本『懷風藻』などもそれらを受ける。また小島『大系』は

過ぎ去る者は川の流れのようで、昼夜も間断なく流れ去り、留まりがたい（論語、子罕（略）、武智麻呂伝、釈奠文、「梁歌早吟、逝水不停」）。ここでは、日月がゆく水の如く流れ去り、孔子も没しその道の実行しがたいことを嘆いたもの。訓は水を主語とみる（「留め難し」ともよめる）。

と解釈する。また、江口『懷風藻』では「孔子が論語の中で、流れ行く水を見ながら無常を歎じたことを踏まえていったもの」、辰巳『全注釈』ではこれらの指摘以外に、万葉集「逝水不留」（卷三）・「逝水之留不得」（卷十九）などをあげている。

これらの注釈を総じてみると、『懷風藻』藤原萬里詩の注釈の流れでは、すべてこの部分は『論語』を出典とする。これは詩題が「仲秋釋奠」とあることにもよる。「釈奠」は孔子を祭る儀式のことだからである。『懷風藻』藤原萬里の当該句に関する解釈はそれで問題がないだろう。

一方、『方丈記』冒頭部の注釈でも同じである。夙に築瀨一雄氏の『方丈記全注釈』や武田孝氏『方丈記全釈』は出典

の一つとして『論語』子罕篇の前述の箇所を指摘している。

しかし、『方丈記』諸注全体を見ると、『論語』を指摘するのは主流ではない。第三節で詳説するが、仏教関係書を例示している注釈が多い。通常、学校教育などでも『方丈記』冒頭部から仏教的無常観を教えるのも思い合わされる。

ところで、日本の古典研究では、儒教と仏教を別イデオロギーとして分類・調査することも多いが、中国の唐頃までの古典を読んでいると、意外に両者を混在させて用いることが多いことに驚かされることがある。また、同じ概念が儒・仏どちらにも存在することにも同様である。本稿の関連で言うならば、儒・仏、双方に「無常観」というものが存在するということである。

日本の古典でも例外ではない。例えば『平家物語』などに、仏教的な流れの上に、意外と儒教的発想が多いことは見て取れる。分類するのが困難なほど、からみあっている部分もある。

稿者としては、『方丈記』冒頭に仏教的発想を見るのは正しいと考えるが、同時に当時必須学問だった『論語』の、その当該文も同時に周知であった可能性もみるべきであると考ええる。

当時の教育の基盤には『論語』を含めた四書五経があった。現代の教育基盤と全く違う。知識層で『論語』は知識としてあるというより、基礎教養である。それは、他の日中の古典

文献を読んでも当たり前に見受けられることと言える。稿者は鴨長明がそのような当時の一般的知識層に居たと解釈している。また、同時に他の中国文学に関しても、かなり造詣が深かったとみるべきだろう。

ところで、『方丈記』冒頭部の出典では、他に様々な出典が指摘されているが、武田孝氏の『方丈記全釈』では、『万葉集』の、

(1) 徂川之 過去人之 手不折者 裏觸立 三和之松

原者

(卷七・一一九)

(2) (略) ；安由波之流 奈都能左加利等 之麻都等里

鵜養我登母波 由久加波乃 伎欲吉瀬其等尔 可賀

里左之 奈豆左比能保流 ；(略)

(卷一七・四〇一一)

の二首をあげ(表記も考慮に入れるため、原文で示す)、

『古今集』以下の勅撰和歌集の歌の中からは、用例を全く見いだすことができない」とし、勅撰和歌集での「行く水」の用例をあげて『水』に比べると、『河(川)』の方が、歲月の経過を譬えるのに適している、とも言えよう」としている。

稿者の調査では万葉歌中に「ゆくみづ」と訓まれるのが二二例、「ゆくかは」で二例。右であげた二首である。その他に、歌の流れ上「ゆく」と「みづ」で三例、「ゆく」と「か

は」が五例ほど見受けられた。うち、「ゆく」と「かは」の例は、「不絶逝 明日香川之 不逝有者」(巻七・二三七九)・「速川之 往文不知」(巻一三・三二七六)・「加波ノ母 佐波尔由氣等毛」(巻一七・四〇〇〇)とある。恋しい思いを「かは」の流れと重ね合わせて詠む歌と叙景とがある。他にも「吾行河乃」(巻一・七九)・「丹生乃河」(略) 由久遊久登」(巻一・一三〇) などもあるが用法は違う。

他に、「ゆくみず」とあるが、歌意から「川(河)」の水のことだと明確にわかる例が6例ほどあるが、わかりやすいものを示すと、

詠河

- (3) 卷向之 病足之川由 往水之 絶事無 又反将見
(巻七・一一〇〇)
- (4) 是川 水阿和逆纏 行水 事不反 思始為
(巻十一・二四三〇)
- (5) (略) ; 射水河 雪消溢而 逝水能 伊夜末思尔
 乃未 … (略) (巻十八・四一一六)

などとある。これらを見ると、万葉歌では「ゆくみづ」は「かは」の「水」そのものであり、「ゆくみづ」と「ゆくかは」は同義であることがわかる。更に(3)では題は「詠河」とあるのに、歌中では「川」と表記する例もある。『方丈記』

の伝本で表記を「河」と「川」の両方があるというが、万葉歌の段階では「河」「川」「水」いずれでも意味背景は変わらなと言えよう。だが、武田氏指摘の勅撰集に「ゆくかは」がないとあるように、万葉歌でも「ゆくかは」より「ゆくみづ」の方が圧倒的に多い。

また、万葉歌の内容的には(3)などは後ろに続く語の序詞として機能。他に恋心や思いを「かは」にたとえて詠んだものが多い。万葉歌ではこのような恋心などを詠む例は多く、(3)の「往水之 絶事無」や、

- (6) 神山之 山下響 逝水之 水尾不絶者 後毛吾妻
(巻一二・三〇一四)
- (7) 可多加比能 可波能瀬伎欲久 由久美豆能 多由
 流許登奈久 安里我欲比見牟 (巻一七・四〇〇二)

などとある。ともに妻や山を慕う気持ちを詠む(序詞でもある)のに対し、『方丈記』「ユク河ノナガレハ、絶ヘズシテ」はこの点で違いを見せている。「絶ゆることなく」主に万葉歌では、水の流れのように思いがとどまらないという用い方をしている。ここには無常観とは違った世界観がある。

これらに対し、『万葉集』の中でも無常観を感じ取れる用法もある。これらは『懐風藻』「逝矣水難留」の注釈において、辰巳『懐風藻全注釈』が指摘する次の(8)(10)の他

に、(9)などの例もあげられよう。

(8) 右一首勅内礼正縣犬養宿祢人上使檢護脚病而醫藥
無驗逝水不留因斯悲慟即作此歌 (卷三・四五九)

(9) (略) 逝水能 登麻良奴其等久 常毛奈久 宇

都呂布見者

(卷一九・四一六〇)

(10) (略) 逝水之 留不得常 枉言哉 人之云都流

逆言乎 人之告都流 (略) (卷一九・四二一四)

いずれも「逝水」が留められないことで人生を表現する流れに位置する。これらは死を表現したものである。そのうち、

(8) では『代匠記』が、

逝水不留は論語云、子在川上曰、逝者如斯、夫不舍晝夜、
悲慟、又云、顔淵死、子哭之慟

と『論語』子罕篇を引用し、諸注これに従う。また、(9)
(10) の諸注も (8) の注を受けたものが多い。『万葉集』で
数多い「ゆくみづ」「ゆくかは」のうち、少なくとも当該に
関しては『論語』子罕篇との影響関係を考えて差し支えない
だろう。いわば、儒教的な無常観とも解せる。

これらの万葉歌や題詞などは、同時代の『懷風藻』と同じ
『論語』を基礎教養として持っている人々によって生まれる

表現であると言えよう。

しかし、稿者は『懷風藻』『万葉集』と『方丈記』とが、
直接『論語』のみを出典にしているだけとは思わない。日本
人はもっと教養が深かったと考えている。中国の詩文を見て
いると、『論語』は周知の上に、更に『論語』から派生した
その後の詩文からも影響を受けているように見受けられる。
それらからの影響はどうだろうか。次節ではその点を論じよ
うと思う。

本節では、『懷風藻』藤原萬里「仲秋釋奠」の「逝矣水難
留」と『方丈記』冒頭部「ユク河ノナガレ」の共通認識とし
て、まずは『論語』があることを示し、そこには儒教的無常
観があるのではないかと推測してみた。

また『方丈記』冒頭部の注釈には万葉歌をあげるものもあ
る。勅撰集に「ゆくかは」の例がないため、本節では、万葉
歌の「ゆくかは」「ゆくみづ」に焦点をあて、日本における
「ゆくかは」「ゆくみづ」というものがどのように表現されて
いるのか考えてみた。

『万葉集』中の「ゆくかは」「ゆくみづ」は、本稿の視点か
ら見るとほぼ同義である。その上で『方丈記』冒頭部「ユク
河ノナガレハ、タヘズシテ」と『万葉集』「ゆく水の絶ゆる
ことなく」を比較すると、言葉の近さはあるものの、意味的
には違うものを表現している。

むしろ『方丈記』冒頭は、『万葉集』「逝水不留」(四五九

題詞)他二首に見られる流れに近いと言える。『万葉集』「逝水不留」では「逝水」で人生をたとえ、主に死を表現している。その、人生をたとえる無常観という点である。これも契沖以降、諸注「論語」を出典としている。同時に「懷風藻」
「逝矣水難留」も同じ流れと言えよう。

本節では、主に諸注の指摘する『論語』の関連で『懷風藻』詩と『方丈記』冒頭部を考えてみたが、膨大にある、その他の中国文献との比較ではどのように見えてくるのか、次節ではその点を確認してみようと思う。

二、中国文献の「逝川」「逝水」

前掲した築瀬氏『方丈記全注釈』と武田氏『方丈記全釈』では、『論語』子罕編を引用し、更に両氏は『文選』所収の陸士衡の「歎逝賦」もあげている。「歎逝賦」の該当部を見てもみよう。

悲哉、川闊水以成川、水滔々而日度。世閱人而爲世、人冉々行暮。人何世弗新、世何世之能故。野每春其必華、草無朝而遺露。經終古而常然。率品物其素。譬日及之在條。恒雖尽而不悟。

これに関して武田氏は「歎逝賦」の当該部は、「老いや死

が必ずやってくることを嘆かず、悠々として楽しく生きよう、という気持ちを書いた文章である」という。そして右を「念頭に置いてこの冒頭の文章を書いた」とする。これは、『十訓抄』が「歎逝賦」を引くことにもよるものだろう。

古代日本人が「歎逝賦」の所収されている『文選』を読んでいたことは、小島憲之氏が詳説されて以降、辰巳正明氏も論じてきている³⁾。それらの流れから考えると時代の下の鴨長明も『文選』を読んでいたとしてもおかしくない。

更に、稿者が中国の唐までの資料を見てゆくと、「歎逝賦」のような概念的な近似の他に、「行川」「逝川」などという表現も別に見いだすことができた。本節ではそれを丁寧に見てゆきたい。

中国の唐までの文献に「行川」という表現はそれほど多くない。唐までの正史では三例ほどで、『後漢書』列伝第四八卷・『宋書』列伝第二七卷・『隋書』志一九卷のみである。その他の文献でも「川が行く」より「川を行く」用例が多い。主語が「川」でなく別にあることになる。また、詩賦などでは、梁詩に二例(うち一例は『文選』所収)ある。更に、『全唐詩』には「行川」の用例は無い。いずれの用例も、単に流れる川の意味合いで用いられており、そこに『方丈記』冒頭や「歎逝賦」を思わせるような思想性はない。

「行河」でも正史には三七例見られるが「行河陰」「行河南」「行河東」などをはじめとする「河」を行く」用例が多い。

その他の文献も同じである。詩賦などの用例では『文選』注のみ。『文選』本文には無い。『全唐詩』には一例あり、「暮行河堤上」という用法で「河堤の上を行く」用例である。

「行水」の用例は非常に多い。概要としては『大漢和』によると「流れゆくみづ。流水」「舟で水上をゆく」「みずをやる。水を治める」「水をめぐる。水勢を巡視する」などの用法があるという。正史に三十一例ある。また、六朝までの詩賦などの例では『文選』に十例ほどあるが、すべて注であり、別の熟語の一部である。『全唐詩』には四例ある。これらは「流れ行く川」としての例である。代表的な例として、杜甫「送高司直尋封閩州」の「良會苦短促、溪行水奔注」など。他の唐詩三例も主に景の一部を表現している。

管見ながら、これら多くの「行川」「行河」「行水」のあり方を見ると、『方丈記』に見られるような無常観に近いものは見受けられない。また、「行川」という表現は意外に少なく、「行河」「行水」と用いられる例が多い。

次に「逝川」ではどうだろうか。「行川」と同様に「ながれ去る川水」で用いられる他、「一度去つて再び還らない喻」『大漢和』としての意味も一般的らしい。

用例全体を見通すと、史書では『梁書』武帝紀に「拯溺逝川之中」とあるのみである。問題の『文選』の用例を示すと、

(イ) 張茂先「勵志詩」 「逝者如斯、曾無日夜」

(ロ) 王仲寶「楮淵碑文」 「感逝川之無捨、哀清暉之眇默」
(ハ) 主簡棲「頭陀寺碑文」 「憑五衍之賦、拯溺逝川」
(ニ) 沈休文「齊故安陸昭王碑文」 「逝川無待、黃金難化」

(ホ) 謝宣遠「王撫軍庾西陽集別時為豫章太守庾被徵還東」 「離會雖相親、逝川豈往復」

の五例を示すことができる。(イ)〜(ハ)のそれぞれ注には『論語』子罕編がひかれ、時が留まらないことを表現している。(ニ)の注は「逝川、已見上文」とある。(ホ)でも「逝川」で川の流れが復らないことを言う。

その他にも『文選』には李少卿の「與蘇武三首」の「臨河濯長纓、念子悵悠悠」の注に「逝川」に別離の念を感じるのだとある。

このように、『文選』における「逝川」の受容は、多くは『論語』子罕編の認識を前提に解釈していたと解せる。日本人の『文選』受容も注付きだったと考えられてきているため、同様である。

『文選』の他に六朝詩では、鮑照の「松柏篇并序」の序に「歎若晨風悲。東海逝逝川」、簡文帝蕭綱の「登琴臺詩」(後述)ともに、時の流れの留まらないことを述べる詩意に用いられている。更に『藝文類聚』に、梁の武帝「孝思賦」 「念過颺之聿忽、悲逝川之不停」(卷二〇・人部四)、隋江斌「建

初寺瓊法師碑」「老驚靈籥、孔惜逝川」（卷七六・内典部上）他、二例ほどの例がある。

また、仏教関係書である『弘明集』に「逝川」は二例『廣弘明集』に四例見られる。うち、「逝川傷於上哲」（『弘明集』卷八）「至於老嗟身患孔歎逝川」（『廣弘明集』卷八）は孔子が念頭にあると思われ、また「日往月來逝川斯遠」（同・卷二十八）・「悲逝川之不停」（同・卷二十九・前掲武帝賦）などは、日月（年月）が留まらないことを言う。

唐詩では、前述したように、『全唐詩』に「逝川」で三〇例ある。紙幅の都合上、中でも「一度去つて再び還らない喩」として著名な例をあげると、李白の「古風」詩「逝川與流光、飄忽不相待」や、鮑溶（相和歌辭）の「古意」「皎日不留景、良辰如逝川」などであろう。

ところで、初唐における「逝川」の用例は少なく、駱賓王の二例のみである。「懷風藻」との関連で考えるなら、特に「秋日餞陸道士陳文林」詩序に「登高切送歸之情、臨水感逝川之歎」とあり注目される。以前の調査より、稿者は『懷風藻』詩人達が駱賓王詩をまとめて見ていたのではないかと考えており、今回の例も興味を惹かれるところであるが、その点に関しては別稿にて論じたい。

用例の検証に戻ると、「逝河」は正史や『文選』、『全唐詩』用例は無く、その他の文献で後代に多少用例があるが、見出し難い用法である。

「逝水」も『大漢和』で「流れ行く川水。一度去つて再び還らないものの喩。逝川」とある。「逝水」は正史には用いられていない。正史以外で『莊子』卷三の疏「變故日新、驟如逝水」や『顏氏家訓』卷三に「光陰可惜、譬諸逝水」、『廣弘明集』卷一五に「逝水非駛。千月難保」など他があるが、なか『文選』には「逝水」の用例はない。しかし、『藝文類聚』には、三例あり、周王褒「太保吳武公尉遲綱碑銘」「逝水詎停、光陰不惜」（卷四六・職官部）、陳除陵「天台山館除則法師碑」「譬彼風電、同諸泡沫、琢火之歎、聞諸往賢、逝水之悲」（卷七八・靈異部）など他ある。特に陳の除陵の碑文は文脈上に「泡沫」とあるのが目を引く。

その他の六朝詩にも「逝水」は見える。いずれも「逝川」と同じく、流れる水に時の流れや人生を重ね合わせている。張正見「傷章侍讀」「高峯落廻照。逝水沒驚波」の張正見は、他の『懷風藻』詩に關係が指摘されている詩人である。劉斌「和謁孔子廟」「何言秦山毀。空驚逝水流」などの用例もある。藤原萬里の詩題が「仲秋釋奠」であることから参考になる。

更に『全唐詩』では「逝水」は三三例ある。うち、前節の『万葉集』（8）（10）でみてきたような、「逝水」が留められないことで人生を表現し、更に死をそこに解釈できる例も少なくない。その中で眼をひくのが、「逝水」と「雲」との対表現が多いことである。「浮雲」では、劉長卿「哭魏兼遂」「一門同逝水、萬事共浮雲」などと五例ほどで、その他

の「雲」も二例ある。例えば漢語にも「浮沫」(浮いてゐるあわ)などという言葉も存在するのだが、「逝水」との対としてはほとんど見受けられない。「逝川」でも同様である。『方丈記』冒頭の「ユク河ノナガレ」に続く「澱ニ浮カブウタカタ」という表現の流れは、調査したうちの唐までの詩文にあまり見かけないと言えるだろう。唯一、前出の陳・除陵「天台山館除則法師碑」に「同諸泡沫、(略)逝水之悲」とあるのが確認されるのみである。しかし、作品の著名度などからも、これを出典の一つに加えるのは、少し躊躇がある。このように、中国文学の側から見た場合、「逝川」「逝水」から「泡」「沫」への表現の流れについては、更に別の調査が必要となる。次節にて、その点に触れたい。

本節では、「逝川」「逝水」の用例を多く示してきたが、それらに時の流れや人生を重ね合わせることは、『論語』から始まって、中国では珍しい表現ではないと言える。

また、『弘明集』『廣弘明集』などの仏教関係文献から見ても、「逝川」「逝水」は『論語』とあえて分離して語る傾向はない。

前述の『方丈記全注釈』『方丈記全釈』などの注釈では『論語』子罕篇と『文選』「歎逝賦」を出典の一つとしてあげているが、唐までの中国文学から見ると、「流れゆく水」によって時の流れや人生を表現する代表的な用例の一つでしかない。

そして、東アジア的な視点から「ユク河のナガレ」に漢字

をあてるとしたら、「行ク河ノナガレ」ではなく「逝ク川のナガレ」とした方が、背後に無常観を想起させることになる。しかし、稿者はむしろ「ユク」に漢字をあてない解釈をとりたい。また「河」についても、伝本では「川」とする本が多いというが、諸注「河」とあてるのが一般的である。しかし中国文学との比較の中では「行河」「逝河」の用法は限定的で、「逝川」とする例が一般的である。更に、『全唐詩』では「行川」「行河」は希少である。例えば黄河を詠んでも「逝川」(駱賓王「晚渡黄河」詩に「誰堪逝川上」他など)とする例もある。これらの広い見地から見た場合、大福寺光寺本などの「河」に従わずに、伝本諸本の「川」を用いる方が、鴨長明の教養を感じさせられる。

また、『文選』を主軸として見た場合、同内容ながらも「逝水」の用例はなくすべて「逝川」と表現される。いずれも注では『論語』子罕篇の指摘が多い。勅撰集他の日本の用例では「ゆく川」より「ゆく水」が一般的であるため、鴨長明が「ゆくみず」とせずに「ゆくかは」としたのは、『文選』などの流れに拠る可能性も指摘できる。または、正史に「逝水」の用例がないことを考えるべきか。後考を俟つ。

三、うたかた

本節では、中国文学における「泡」「沫」と『方丈記』冒

頭部の「澱ニ浮カブウタカタハ」との比較を補足的に行う。

『方丈記』の「うたかた」を考える上で参考になる万葉歌としては、右の(8)の「是川 水阿和逆纏 行水」や、

(11) 卷向之 山邊響而 徃水之 三名沫如 世人吾等
者 (卷七・二六九)

である。また、「ゆくかは」「ゆくみづ」はないが、「假合之身易滅 泡沫之命難駐 所以千聖已去 百賢不留」(巻五・八八六)などという用例もある。(11)では「吾等」は水の泡のようにはない存在であることを表現している。この(11)歌は『拾遺集』にも採録されており、神田秀夫氏はこの歌と『方丈記』冒頭に関して、「右の歌も長明の眼にふれたであろう」としている。これに対して前掲築瀬氏の『方丈記全注釈』では、様々な根拠をあげて、冒頭部への影響を否定している。築瀬氏は「長明が必ず愛読したと思われる『唯摩経』を、修辭的典拠としては、『文選』をあげて、調和をはかっているのである」とし、更に空海の「雜言。入山興一首」詩(『経國集』巻第十)の影響を見ている。該当部分は、

君不見、君不見。王城城裏神泉水。

一沸一流速相似。前沸後流幾許干。

流之流之入深淵。入深淵、轉轉去。

何日何時更竭矣。

とあるが、稿者は後述する仏典の方がより近いものを感じる。また、当該箇所に関して、他の注釈などを見ていくと、古くは横島昭武の『方丈記流水抄』で『唯摩経』十喻、日本古典文学大系『方丈記』では、『法句経』無情品他を、新日本古典文学大系では『涅槃経』寿命品などを指摘する。また、天台宗の三諦説をあげる芝波田好弘氏などの論もある他、多く仏教と関係で論じられてきたと言える。

本稿の主眼とする東アジアとしてのあり方から考えてみると、これはうなずける要素がある。広く漢語に用いられる「泡」「沫」の用法をあたっていくと、その大半が仏教関係の文献に見えるからである。特に「カツ消エカツ結ビテ」の部分に限定し、生まれては消える「泡」「沫」を表現した部分を『大正新脩大藏經』からあげてみる。

(A) 天下無常，人如水泡，一成一壞，莫能自存，

(佛開解梵志阿颺經・阿含部上)

(B) 猶大雨時，滴水成泡，或生或滅，

(中阿含經六十卷・阿含部上)

(C) 一泡壞者一泡成，人生世間，生者死者如泡起頃。

(鐵城泥犁經・阿含部上)

(D) 我以天眼觀天雨墮水中，見一泡興一泡滅，

(E) 人如天雨水中泡起，雨從上滴之，一泡壞一泡成。
〔閻羅王五天使者經〕・阿含部上

(F) 譬如大雨滂泡，一起一滅。
〔泥犁經〕・阿含部上

(G) 即便生泡，速生速滅，生死之法，速生速滅。
〔雜阿含經〕・阿含部下

(H) 天雨滂水，一泡適起一泡即滅，目土漢籍。
〔別譯雜阿含經〕・阿含部下

(I) 若水中泡，一滴滅一復興。
〔五陰譬喻經〕・阿含部下

(J) 愚冥之士以此為安，而見侵欺，如水上泡適起便滅。
〔太子瑞應本起經〕・本緣部上

(K) 菩薩知諸受相，如水中泡，一起一滅，是為知受相。
〔普曜經〕・本緣部上

(L) 又如天雨水滴成泡，旋滅旋生不能暫住。
〔摩訶般若波羅蜜經〕・般若部四

(M) 心遠至而獨行，心譬如流水上生泡沫須臾而滅。
〔佛說大乘菩薩藏正法經〕・寶積部上

(N) 唯有無常苦空無我不淨說假，如水上泡速起速滅。
〔佛說遺日摩尼寶經〕・寶積部下

(O) 如雨滂水泡，有生有滅無有決定。
〔佛說佛名經〕・經集部一

〔持世經〕・經集部一

(P) 觀水聚沫所有前際，觀水泡起或滅。

〔佛說無垢稱經〕・經集部一
(Q) 觀其身相，卵胎濕化假和合成，如沫如泡乍生乍滅。
〔佛說巨力長者所問大乘經〕・經集部一

(A) (Q) を見てゆくと、「泡」「沫」が生まれ、消えるのを人の人生と重ねあわせて説くという表現が多いことがわかる。例えば (A) でも、天下は無常であり、人は水泡が一は成り一は壊れる如きであると言う。右の用例全体としても、このような無常觀を説く際に用いられることが多い。

また『方丈記』では「カツ消エカツ結ビテ」とあるが、多くの例は「泡」「沫」が、結び「成」「生」「起」「興」、かつ消える「滅」「壞」例だが、(C)(L)のみ「消え、結ぶ」に似る、(C)「壞」れ「成」る、(L)「滅」し「生」るとある。

更に (Q) では「沫の如く泡の如く乍つ生れ乍つ滅す」と訓める。「生」と「滅」ではあるが、「カツ消エカツ結ビテ」に近い表現をみることができる。「佛說巨力長者所問大乘經」は平安中期以降頃の成立で、鴨長明と時代的に近い表現ともみることできる。

これらに、「ヒサシク留マリタルタメシナシ」と続く文献を見いだせないでいるが、単体での用例はかなりある。

(R) 猶如猛火焚乾草，亦如焰幻無有實，亦如泡沫不久停

〔方廣大莊嚴經〕・本緣部下

(S) 當觀水上泡，亦觀幻野馬者，如彼水泡不得久停，

〔出曜經〕・本緣部下

(T) 女白王言。水泡虛偽不可久停。

〔出曜經〕・本緣部下

(U) 意識如野馬，水泡不久停，無身慧自淨，是謂平等空。

〔菩薩瓔珞經〕・經集部三

(V) 有為之法必歸磨滅。泡幻形質何得久停。

〔續高僧傳〕 京大慈恩寺釋玄奘傳一・史傳部二

(W) 菩薩摩訶薩自觀己身無常破壞，如彼沫聚不可長久，

〔大方等大集經菩薩念佛三昧分〕・大集部全

などある。このような傾向は『大正新脩大藏經』に非常に多いが、他の中国の文献では、管見にして探し出せていない。

本節では、第二節・第三節の補足として、『方丈記』冒頭部の「澱ニ浮カブウタカタハ、カツ消エカツ結ビテ、ヒサシク留マリタルタメシナシ。」の部分为中国の文献から見るとどう確認できるかを試みた。

結論として、「ウタカタ」を主語或いは主体とする「カツ消エカツ結ビテ」に近い表現は經典に非常に多く、また同じく「ウタカタ」を主語或いは主体とする「ヒサシク留マリタルタメシナシ」も同様である。

鴨長明はこのような仏典の語を直接、或いは間接的に知っていて、和語に表現したものと考えている。

おわりに

第一節では、『懐風藻』藤原萬里「仲秋釋奠」の「逝矣水難留」と『方丈記』冒頭部「ユク河ノナガレ」を、万葉歌を参考にしながら考察した。『懐風藻』『方丈記』ともに万葉歌の「ゆく水の絶ゆることなく」より、題詞などにある「逝水不留」の方向に近いと推測した。これは従来より『論語』を出典と考えられてきている。

第二節では、中国の文献においては「行川」「行水」より「逝川」「逝水」の方が無常観などの思想が見受けられることを示した。『弘明集』『廣弘明集』など仏教関係文献から見ても、「逝川」「逝水」は『論語』とあえて分離して語る傾向はなく、その他の文献においても同様である。

そして、それらから見ると、『方丈記』「ユク河」は、伝本に多い「ユク川」の方が良いと思われる。また「ユク」は「行く」と漢字をあてない方が、背後に無常観を想起させることになる。

第三節では、補足として、『方丈記』冒頭部の「ウタカタ」を中国の文献から確認した。

結論として、「カツ消エカツ結ビテ」「ヒサシク留マリタル

タメシナシ」それぞれは経典などに用例が多いが、双方が共に用いられる例があげられなかった。

稿者は、鴨長明は『方丈記』冒頭部で、「ユク川」で儒教的無常観、「ウタカタ」で仏教的無常観、双方を表現したグローバルな冒頭を指摘したものと結論づけたい。そして、広く東アジア世界を意識した書き出しと見ている。

※本稿における『懐風藻』の本文は日本古典文学大系（岩波書店）『方丈記』本文は新日本古典文学大系（岩波書店）、『万葉集』も新日本古典文学大系（岩波書店）によった。正史・『文選』・『全漢三國魏晉南北朝詩』・『全唐詩』はすべて中華書局の刊行するもの、『藝文類聚』は中文出版、『經國集』は群書類従本を、仏教関係文献は『大正新脩大藏經』（大正新脩大藏經刊行會）の本文を用いた。また『大藏經全解説大事典』（雄山閣）を参考にした。

※本稿にあげた諸注他とその略称は以下の通りである。

- ・ 釈清譚『懐風藻新釈』（丙午出版社）……釋清譚『新釈』
- ・ 林古漢『懐風藻新註』（パルトス社）……林『新註』
- ・ 杉本行夫『懐風藻』（弘文堂）……杉本『懐風藻』
- ・ 小島憲之『懐風藻（下略）』（岩波書店）……小島『大系』
- ・ 江口孝夫『懐風藻』（講談社）……江口『懐風藻』
- ・ 辰巳正明『懐風藻全注釈』（笠間書院）……辰巳『全注釈』
- ・ 土佐朋子『懐風藻箋註 本文と研究』（汲古出版）『箋註』
- ・ 諸橋轍次『大漢和辞典』（大修館書店）……『大漢和』

・ 築瀬一雄『方丈記全注釈』（角川書店）

・ 武田孝『方丈記全釈』（笠間書院）

これらの引用に関しては、各々に注は施さなかった。

※本稿の資料の収集は、主に台湾の「中央研究院漢籍電子文獻」「寒泉古典文獻全文檢索資料庫」における檢索結果を参考にさせていただいた。また、「古籍全文檢索資料叢書」の「先秦漢魏晉南北朝詩」「全上古三代秦漢三國朝文」「全唐詩」「全唐文」の檢索結果も参考にした。

〈注〉

- (1) 新釈漢文大系『論語』（明治書院）注による
- (2) 板垣徹「万葉集における『ユク』の訓字——人麻呂歌集を中心に」『美夫君志』二七号などに詳しい
- (3) 小島憲之『上代文学と中国文学』（瑞書房）
- (4) 前掲・辰巳正明『全注釈』（笠間書院）他
- (5) 前掲・小島憲之『大系』では紀末茂の「臨水鯢魚」詩は「張正見の釣竿篇の盗作」とする。
- (6) 神田秀夫「ゆく河（方丈記注解Ⅰ）」『解釈と鑑賞』一九巻五号
- (7) 石黒吉次郎『方丈記』が影響を受けた作品「歴史と文学の会編『新視点・徹底追跡 方丈記と鴨長明』（勉誠出版）を参考にした。